

『ドライブ・マイ・カー』

2021年／日本／濱口竜介監督作品

日本映画初の米国アカデミー賞作品賞
ノミネート作品 『ドライブ・マイ・カー』を観て

会員 富田 寛之 (48期)



【ドライブ・マイ・カー インターナショナル版】
発売元：カルチュア・パブリッシャーズ
セル販売元：TCエンタテインメント
© 2021 『ドライブ・マイ・カー』製作委員会

本作を観るにあたり、3時間の長編映画、途中で寝たりしたらどうしようとも思っていました。杞憂でした。オープニングから心臓を掴まれ、最後まで、台詞や俳優の表情の全てから耳が、目が離れませんでした。

過去に観た小説原作の映画と異なり、二次創作というより、小説を1頁ずつじっくり読んでいるような、俳優の声、トーン、細かい所作、音楽、効果音が文章の彩りとして頭の中に入っていきような感覚を得られる映画でした。

本作は、現実とチェーホフの舞台「ワーニャ伯父さん」がシンクロしているかのように進みます。現実では、舞台演出家、俳優の主人公「家福悠介」（以下「悠介」）は、テレビ脚本家の妻「家福音」（以下「音」）を突然亡くします。音が亡くなる数日前、悠介は、音が若い俳優高槻と不倫している現場を目撃します。しかしながら、悠介はそのことに触れないまま、音と普段通りの生活に戻ろうとします。音から、「話がある」と伝えられ、家に帰れない悠介が、深夜に帰ると音は倒れており、そのまま亡くなってしまいます。

音は何を話したかったのか、音の愛はあったのか等々に関する疑問や葛藤のなか、悠介は、妻の死後、チェーホフの脚本「テキスト」に向かい合うことが出来なくなり、ライフワークであった「ワーニャ伯父さん」の「ワーニャ」役を演じることが出来なくなってしまいます。

悠介は、仕事場に向かうとき、必ず車を運転しており、その際、「ワーニャ伯父さん」の脚本の「ワーニャ」役以外の台詞を音が吹き込んだテープを流し続けて

います。映画のドライブシーンで、このテープが流れ、「テキスト」が音の声で流れ続ける。この「テキスト」を読む音の音が、今でも、頭からは離れません。その一言一言が悠介の心にナイフのように刺さって、そして、私の心にも刺さって、心が苦しい。この苦しさは、「ワーニャ伯父さん」の舞台の主題である、生きることの苦しさなのかと思います。

悠介は、地方の演劇先で「ワーニャ伯父さん」の演出を行うことになります。その演出の中で、悠介は、俳優高槻、専属ドライバーとなった「みさき」との関係を通して、自身の葛藤にも向き合い、「テキスト」にも向き合っていくこととなります。みさきと悠介は、みさきの故郷に向かいます。2人が生きる苦しみ、罪の意識と向き合い、生き抜いていくために必要なドライブであるように思えました。ドライブ・マイ・カーという題名の意味を改めて考えさせられるシーンでした。

劇中劇での最後の台詞が、本作の主題そのものではないかと感じました。「生きていなくなっちゃ…。長い長い昼と夜をどこまでも生きていきましょう」「あちらの世界に行ったら、苦しかったこと、泣いたこと、つらかったことを神様に申し上げます。そうしたら神様は私達を憐れんで下さって、その時こそ明るく、美しい暮らしができるんだわ」。実は、この台詞は、手話で語られます。悠介の演出する「ワーニャ伯父さん」では、各俳優が異なる言語で台詞を話し、字幕が出ます。普遍的な価値観が、人種、言語、宗教を超越するというメッセージかもしれないと感じました。